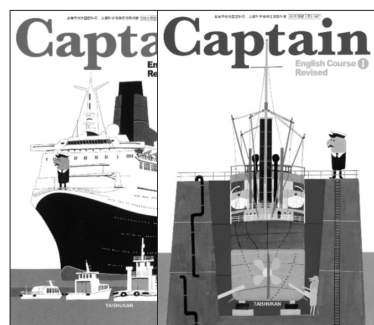


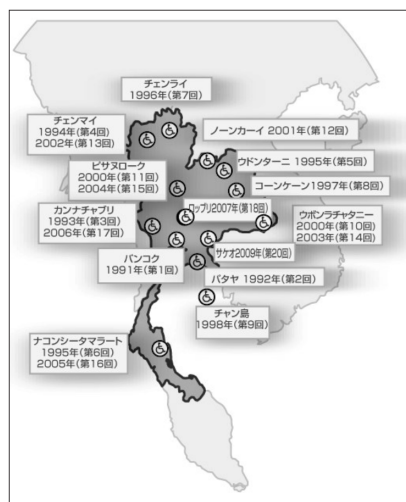
Captain English Course I, II Revised

- 英語 I Lesson 8 Volunteering in Thailand
- 英語 I Lesson 10 War of the Landmine
- 英語 II Lesson 7 Life in Space



■英語 I Lesson 8

本校生がタイ王国を訪問し、車椅子修理を通して現地の人々と交流する国際交流タイボランティア活動は、2009年で20年目を迎えた。この活動は、本校創立30周年を記念した事業で、当時の校長小沼新作氏が「生徒の心に記念碑を！」、そして「欧米ではなくアジアに目を向けて」をキャッチフレーズに計画された。以来この活動はタイ全土をほぼ一周、参加生徒はのべ240名を越えた。今回は12月12日から19日までの8日間、首都バンコクから東へ400km、カンボジアとの国境接するサケオ県で行われた。タイボランティア活動の目的は、メンバー一人一人が技術者として、タイの大地のもと車いす修理と向かいあうことで、技術や判断力の向上、そしてコミュニケーション能力の向上や異文化交流を行うことである。これは、現地スタッフの献身的な活動で支えられている。



主な活動場所
1991年～2009年

We are challengers, and not volunteers!

私が参加し始めた頃には観光気分の参加生徒もいたが、参加生徒の意識は確実に変化してきた。今ではそれぞれのテーマを掲げ、リーダーを中心に生徒主導型の活動となった。これは良き伝統として先輩から後輩へと年々引き継がれている。また、毎夜全体ミーティングでは活発な意見交換が行われる。「車いすは直してあげるのではなく、直させてもらっている。決して手抜きをはいけない」など。また、現地スタッフからも“Open your eyes! Open your mouth! Open your mind!”など、メンバーの心に響くメッセージが毎年発せられている。

工業科+家庭科=最高の車いす修理！

また技術面でも大きく進化したことがある。シート修理技術だ。シートの修理には板材やクッション材の貼り合わせといった工業科の技術に加えて、シート生地を裁断、縫合するなどの家庭科の技術も必要である。「工業科の技術」と「家庭科のやさしさ」のコラボレーションで綺麗な車椅子を気持ちよく、長く使ってもらえるようになった。計4回活動に参加し、事前研修や現地で指導してくれた家庭科の関口朱生子先生（現佐野女子高等学校勤務）には感謝の気持ちでいっぱいである。

技術はBorderを越えて

今回活動したサケオはカンボジアとの国境の街で、このあたりは数年前には銃弾も飛び交ってい



修理の様子

たほど物騒だったとのこと。両国の抱える諸問題は今でも続いているようだ。

また修理活動でお会いした老人たちの中には、タイ語ではなくカンボジアの言葉を話す人も多かった。しかし日本から持ってきた車椅子をプレゼントすると嬉しそうに微笑んでくれた。

宿泊ホテルからほんの数キロはなれた国境の市場は賑わいを見せ、タイとカンボジアの物資や人々が行き交っていた。日本にいては決して感じることの出来ない“Border”をここに実感した。

今回の活動ではサケオの工業高校生が毎日一緒に修理活動を手伝ってくれた。はじめて会う日本とタイの高校生には言葉は通じない。しかし、彼らには共通の「技術力」がある。「言葉」を「工具」に持ち替え、コミュニケーションが始まるのに、それほど時間は必要なかった。数時間後、修理会場あちらこちらで笑いや歓声が聞こえた。技術は確実に国境を越えたのだ。

Think Globally, Live Locally

最後に、活動の新テーマとしてこの言葉を上げたい。「地域に根ざして、世界を観る」とでも訳そうか。「広く世界を観て感じる事が出来る感性力と実践力の育成」を若者に望む。また、そこには地域に根ざした地道な活動こそがベースとなることも忘れてはならない。これからもこの活動が、若者たちに新しい価値観を見出すプログラムとして、長く継続・発展してゆくことを望んでいる。

おぐらみきひろ

(小倉幹宏・宇都宮工業高等学校教諭)

■英語 I Lesson 10

地雷対策とは

地雷の恐ろしさのひとつは、それがどこにあるのかわからないことにある。つまり、いつ誰がどの種類をいくつ埋めたのか、その記録がないためにどこが地雷原なのかわからず、一般の人々がその犠牲になってしまう。これは *Captain I* で紹介されたカンボジアに限った話ではなく、地雷原のあるほとんどの国で同じことが言える。また、対人地雷は手のひらにのるほどの小さな軽いものなので、大雨や雪解け水に流されて、簡単に移動してしまうこともよくあり、このことも地雷原の特定をより難しくしている。

これまで対人地雷全面禁止条約（通称オタワ条約）によって、地雷除去は確実に進められてきた。それでもまだ、約70カ国、3,000km²が地雷に侵されている。それはルクセンブルグの国土とほぼ同じ広さである。

人々が安全に暮せるように確実な地雷除去をめざす作業は、人の手によって行われる。大型の地雷除去機もプロセスの一部に使われることがあるが、残念ながら現在の技術をもってしても機械除去だけでは安全な土地にはならない。最後には専門技術を持つ人が金属探知機や地雷探査犬を使って除去を完成させる。そのため1日の作業範囲も限られるが、1つでも地雷が残っていれば危険なので、単にスピードが上がればよい、というものではない。

そこで除去が終わらない地域での被害を防ぐために、「地雷回避教育」が行われる。これは、その地域にあると推定される地雷の種類やその危険性、実際に地雷を見つけたときの対処方法などを伝えることで、そこに住む人々が自分で危険を回避できるようになるための教育プログラムである。こういった情報を人々が知ることで、確実に被害を減らすことができる。

除去や回避教育が進められる一方で、まだ犠牲者が後をたたない。犠牲者の多くは、地雷の爆発

で体の障害だけでなく、爆発の恐怖や絶望感で精神的にも長く苦しめられる。そして、その苦しみは本人から家族、地域の人々にも広がっていく。彼らは運が悪いかわいそうな人たちなのだろうか。そうではない。彼らは、誰にでも保障されるべき「紛争や犯罪などの暴力から保護される権利」を侵害された被害者である。したがって、国をはじめ我々市民もその支援に責任をもたなければならない。そして、その支援は事故直後の医療やリハビリテーションのみならず、その後の生活全般に対して行われる必要があり、そこには当事者である被害者自身に関わるのが非常に有効である。彼らは犠牲者の状況や気持ちをよく理解できる上に、生活上の技術や社会参加の方法を知っているからである。

これらの地雷対策活動を進めてきたのは、NGOの人々である。

地雷をなくす運動—地雷廃絶キャンペーン

地雷をなくそう、という世界的な運動が起こったのは、1990年代初めのことである。それは、一人の思いから始まった。

ベトナム戦争で障害を負ったアメリカ人のボビー・ミューラーは、カンボジアで戦争被害者に義足や車いすを配る活動をしていた。しかし、次々に手足をなくした人が押し寄せる状況に、「どんなにものをあげても状況は変わらない。地雷自体をなくさなければ！」と気づき、それを訴え始めた。しかしその頃は、武器について一般市民が政府に口を出せないと考えられたため、人々の賛同はなかなか得られなかった。それでも、次第に地雷の残虐さを知る被害地で働く人たちや犠牲者たち、また彼らの家族や友人達が集まり、「地雷禁止国際キャンペーン (ICBL)」の誕生となった。

ICBLは、「地雷問題は軍事ではなく人道的な問題だ」と訴えるために、被害者たちの惨状を各国政府に知らせたり、地雷禁止に賛成する国の人々が集う会議を設定したりした。こうして、

NGOであるICBLと政府の協働というこれまでにない手法による「地雷禁止の条約作り」が進められた。

ICBLは、軍事、国際法、医療など様々な分野の専門家、NGOで働く人、地雷被害者、さらに多くの市民が連なって世界的な組織となった。そして、広く人々に地雷禁止を訴えるのと同時に、各国政府への働きかけ、条約に関する話し合いを続け、ついに1997年12月、地雷の生産、保有、使用、移譲を禁止するオタワ条約の成立に成功したのである。このことから、オタワ条約は「市民が作った条約」と呼ばれている。

未来にむかって

世界の約4分の3以上の国々（2010年2月現在156カ国）がオタワ条約に参加して、地雷の生産、使用はほとんどなくなった（08年には2カ国のみ）。オタワ条約の非締約国にも「地雷は非人道的な使えない兵器」と認識されるようになり、世界は確実に「地雷のない世界」に向かっている。それでは、残された課題は何か。

ひとつは、今も年間に約5千人以上が被害に遭っていることである。しかし犠牲者への支援は少なく、彼らが自由に生きられるための支援が必要である。また地雷回避教育の拡充も求められる。さらに重要なことは、地雷が二度と使われないように、監視（モニタリング）していくことである。これは市民に求められる大切な働きである。

1997年のオタワ条約調印式の時、“Can you ban landmines?”と聞かれて、ICBLの人たちは“Yes, we can.”と応えた。条約発効から5年目の2004年には同じ質問に“Yes, we will.”、10年目の2009年には“Yes, we have.”と応えられるようになった。この変化は、市民のキャンペーンによる成果である。「私たちは地雷問題を前に無力ではない」、そういうメッセージをこのレッスンから受け取っていただければ幸いである。

うつみじゅんこ
(内海 旬子・地雷廃絶日本キャンペーン事務局長)

■英語Ⅱ Lesson 7

この課では宇宙飛行士の土井孝雄さんにインタビューをし、宇宙での生活について説明していただきました。ここでは、ISS（International Space Station：国際宇宙ステーション）の建設による宇宙開発の現状について、そしてISSでの生活はどのようなものかについてご紹介いたします。Captain IIにて書かれている内容の補足として参考にしていただけると幸いです。

ISSでの生活

Captain II, 60ページにも写真が掲載されていますが、ISSは人類最大の宇宙施設で、2011年に完成予定となっています。長期間にわたり人間が滞在できる宇宙実験施設を作り、宇宙だけの特殊な環境を利用したさまざまな実験や研究を進め、新しい科学的知見や高度な宇宙技術を獲得し、生活や産業に役立てていくことを目的としています。

この課では、ISSでの生活について、とりわけ水の問題を取り上げています。実際のところ、ISS内の水の全消費量の60～70％はスペースシャトルなどの補給に依存しているため、教科書本文でも触れられているように、水は貴重で、大部分は再利用され、シャワーはなく、特殊なシャンプーで洗髪したりしています。加えて、洗濯もすることができません。衣服に関しては、下着は毎日、その他の服も数日使用したら、廃棄することになっています。ちなみに、宇宙飛行士の着る衣服は、打上げ時と帰還時に着用するフライトスーツを除けば、地上と変わらないものです。

また、インタビューでは宇宙飛行士が睡眠を取る場所について、3人分の小さい空間であると説明されていますが、これはスペースシャトルの場合です。ISSでは5つの個室が設置されており（2009年2月現在）、睡眠だけでなく、着替えや自由時間を過ごすことにも使われます。

この課の本文を読んだだけでは、寝るスペース

が少ない、水が限られているなど宇宙での生活は大変な印象を受けるかもしれませんが、地上とは違う生活をしている宇宙飛行士がストレスをためないように、さまざまな注意が払われており、メールをする以外にもDVDで映画を楽しんだり、祝祭日にパーティを行うなど余暇を楽しむ工夫がされています。

宇宙実験への期待——「きぼう」

「きぼう」はISSに取り付けられた、日本が開発した実験棟で、宇宙飛行士が長期間滞在できる有人宇宙施設です。

本課でインタビューをした土井孝雄さんは「きぼう」の打ち上げ第1便にあたる2008年3月のISS組み立てミッションで「船内保管室」を取り付ける作業を行いました。そして、2009年の3月から6月までISSに滞在した若田光一さんは、「きぼう」の打ち上げ第3便にあたるISS組み立てミッションに従事、「船外実験プラットフォーム」、「船外パレット」の取り付けに成功し、「きぼう」は完成しました。

2008年8月から開始した「きぼう」での宇宙実験では、新しい発見が期待されています。例えば、「タンパク質の結晶成長実験」では人体の中でさまざまな働きをしているタンパク質の構造を明らかにすることで、新しい薬剤の開発につながると注目されています。また、宇宙飛行士自らが実験台となり、微小重力空間が与える人体への影響をデータとして集め、人間が宇宙で安全で健康に暮らすための医学研究としても利用されています。

宇宙実験により広がる可能性に今後も注目していきましょう。

（編集部）

【参考資料】

『スペースガイド 2009』JAXA 宇宙開発センター発行